

国語問題

〔問題一〕 次の各文の――を付けた漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- (一) バラの花の香りが漂う。
- (二) 体力が衰える。
- (三) 相手の気に障る発言をしない。
- (四) 彼からの頼みごとを承諾する。
- (五) 寸暇を惜しんで努力する。

〔問題二〕 次の各文の――を付けたカタカナの部分に当たる漢字を書きなさい。

- (一) 相手の誤解をマネク。
- (二) オゴソかな雰囲気の式典。
- (三) 病人に手厚いカンゴを行う。
- (四) あの寺のシュウハについて調べる。
- (五) あの人はこの国のシホウだ。

〔問題三〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

自分の「正しさ」をゴリ押しする人の心の中にありがちなのが、①「自分は正義の味方」という自己陶醉だ。ソーシャル・ジャスティス・ウォリアー(SJW)という言葉があるが、元々は進歩的な観点に立って社会を改革しようとして発言したり、運動を推進したりする人を指すものだった。※、今では、異物を排除しようとするような保守的な人を指したりもする。いずれにおいても共通なのは、社会を良くしたいという正義感に基づいて、自分と価値観の合わない人物や組織や制度などを徹底的に攻撃するところである。

本人は自分が絶対に正しいと思い込んでおり、正義の味方を気取っているが、冷静な第三者からしたら、偏見に凝り固まっているようにしか見えない。あまりに強硬で、違う意見にたいしてまったく聞く耳をもたないからだ。傍から見ると、「ずいぶん歪んだものの見方だな」、「やたら極端なことを言うなあ」、「そこまで攻撃的にならなくてもいいのに」などと思わざるを得ないのだが、本人は自分の言い分は絶対に正しいと信じ込んでいる。

周囲の人は、「そこまでムキになるほどのことじゃないだろうに」、「そんなに事を荒立てる必要はないのに」と呆れるわけだが、本人は事なかれ主義で見過すのは間違っていると思っており、みんなが言いにくいこともはっきり主張する必要があると、使命感すら感じている。

おかしいことがあっても見て見ぬフリをする保身的な人が多いなかで、言うべきことをきちんと主張する自分は正義の味方であり「正義のヒーロー」なのだといった意識さえ抱いている。

そんなふう到自己陶醉しているため、冷静に現実を見ることができず、極端な形で一方的な正義感を振りかざしたり、自分の言い分が通じないと、「どうしてこんな当たり前のことがわからないのだ」と相手を攻撃する。

なぜそこまで「正義のヒーロー」を気取る必要があるのか。そこに潜んでいるのが劣等コンプレックスだ。劣等コンプレックスの一変種に、②メサイア・コンプレックスがある。コンプレックスというのは、無意識のうちに人の思考や感情や行動に影響を与えているものであり、この場合は「自分は救世主である」といった思いを無意識のうちに抱えているかのように、必要以上他人を救いたがるのである。

ユング心理学者河合隼雄は、メサイア・コンプレックスに動かされている人は、他人を救いたがる傾向が強く、不必要に助けようとして、同情したりするので、とにかく「ありがた迷惑」という言葉がピッタリと当てはまるという。

本人は他人のために動いているつもりなのだが、心の深層には劣等感と歪んだ優越感が複雑に絡み合い、うごめいている。

自分が仕事で有能さを発揮していなかったり、周囲にうまく溶け込めず不適応感をもっていたりして、劣等感を無意識のうちに抱えており、その劣等感を振り払おうとするかのように、「正義のヒーロー」気取りで自分が思う悪を叩く。

コンプレックスというのは人の無意識層に作用するため、このような人は無意識の衝動に突き動かされており、現実を冷静に見ることができずに、一方的な思い込みで行動する。ゆえに、相手の言い分を耳を傾けようとせず、相手の立場や意向をまったく配慮することなく、自分勝手な理屈を振りかざすのである。

メサイア・コンプレックスには自分に価値を感じることができないといった劣等コンプレックスが絡んでいるわけだが、^③「正しさ」を振りかざす人の心の中には、自分の有能さを確認したいという思いも潜んでいるのではないか。

何らかの失態を演じた人物、あるいはそのように思われる人物を激しく批判する人物、何らかの落ち度があると思われる店や企業、役所、学校、病院などを執拗に糾弾しようとする人物を見ていると、「自分の力」を感じたいという欲求の強さを感じる。

なぜそこまで攻撃的になるのか疑問に思う人もいるかもしれないが、自分の発言が相手方にダメージを与え、相手が困ったり、自分にひれ伏したりすることで、「自分の力」を感じている。いわば^④自己効力感、自分はやればできるんだという感覚を追求しているのである。

そうした形で自己効力感を得ようとするのは、普段の生活で思うように力を発揮できず、自己効力感が低いからである。それゆえに、自分に自信をもちたい、自分に価値を感じたいといった思いが非常に強い。

そのような人にとって、自己効力感を高めるチャンスを与えてくれるのが落ち度のある人物や組織なのだ。

失言をした有名人をネット上で叩く書き込みをしたり、商品に不具合のあった企業や窓口対応がまずかった公共機関、客対応がまずかった店などをネット上で叩く書き込みをしたりして、批判の声が広がったり、相手方が謝罪したり、困惑する様子が伝わってきたりすると、自己効力感が高まる。

あるいはだれかが叩いているのをネット上で見つけて、それに便乗して批判的な^{*}ツイートをしたりすることで、批判の拡散を確認しながら自己効力感を高める。

このように、落ち度があると思われる人物や組織を叩くことで自己効力感が高まる経験をすると、それが癖になる。

歪んだ正義感を振りかざして人や組織を執拗に攻撃する、いわゆるクレイマーと言われる人には、このような心理により人を叩くことが癖になっている人が、かなりの割合で含まれているのではないか。

(榎本博明『正しさをゴリ押しする人』より)

(本文に一部表記の変更があります。)

(注) ツイート⇨ツイッターというSNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)上にコメントを書き込むこと。

(一) —線部①『自分は正義の味方』という自己陶醉とありますが、本文中での「自己陶醉」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 事なかれ主義の周囲の人が主張しないことを利用して、彼らの主張を自分の主張として披露することで自分の手柄とすること。

イ 事なかれ主義の周囲の人の主張を全否定し、自分の正当性を一方的に主張することに心地よさを感じることに。

ウ 事なかれ主義の周囲の人のことを良しとせず、主張をする自分の姿を正しい振る舞いであると捉え、気持ちよくなることに。

エ 事なかれ主義の周囲の人を自分の主張を悪であると捉え、彼らを含む自分以外の者を攻撃して名声を上げようとするに。

(二) ※に入る語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア または イ だが ウ そして エ たとえば

(三) —線部②「メサイア・コンプレックス」とありますが、本文中での「メサイア・コンプレックス」を説明した次の文のに入る最も適当なことを、それぞれ本文中から、①は九字、②は六字で抜き出さない。

無意識のうちに①と**思**って他人のために行動する、他人にとっては②にあたるもの。

(四) —線部③『正しさ』を振りかざす人の心の中には、自分の有能さを確認したいという思いも潜んでいるのではないかとありますが、「自分の有能さを確認したいという思い」以外に、本文中で挙げられている心の中に潜むものとして最も適当なことを、本文中から十字で抜き出さない。

(五) —線部④「自己効力感」とありますが、本文中で挙げられている「自己効力感」を上げるためにすることとして適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 客に対して悪い対応をされたときに、ネット上にその内容を曝して叩くこと。

イ ネット上で叩かれているものに対して、自分も乗っかって叩くこと。

ウ 失態を犯した企業が出している製品に対して、物理的に攻撃を行うこと。

エ 不備のあった企業などが謝罪をしたり、困惑したりしている様子を見ること。

(六) 本文の説明の仕方として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 劣等コンプレックスによって生じるメリットについて、一般論や資料を活用して説明している。

イ 劣等コンプレックスを抱える人について、具体例を挙げながら今後の彼らの課題を提示して説明している。

ウ 劣等コンプレックスを内に秘めた人の特徴とその課題を、実際に起きた事例を挙げて説明している。

エ 劣等コンプレックスの問題点を、学者の言い分と問題点を浮き彫りにさせる事例を挙げて説明している。

(七) 本文中で筆者は「自分の『正しさ』をゴリ押しする人」について述べているが、そうした人を落ち着いた目で見たとき、どういう人に見えると考えていますか。「相手」「偏見」ということばを必ず用いて、五十字以内で答えなさい。(句読点も字数に含めます)

〔問題四〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

高校二年生の美緒は、自分の癖が原因で学校での人間関係に悩み、学校に行こうにもお腹を壊してしまふようになっていたが、父方の亡くなった染織物職人の祖母が作ったショールをかぶって心を落ち着かせていた。ある日、母にそのショールを捨てられたと思い、父方の祖父がいる岩手県の盛岡へと家出する。この場面は、しばらくの間、染織物職人の見習いとして過ごさることになった美緒が、染織物の仕事が終わるときに、祖父の手伝いをしながら話をしてしている場面である。

祖父が発送する荷物は大量のスプーンだった。長年、日本と世界のさまざまな土地に行くたびにこつこつ集めてきたもので、木材や金属などでつくられたものが一本ずつ仕切られたケースに整然と納まっていた。

「いつかこのコレクションを持って旅に出ようと思ってた」

銀色のスプーンをクロスで磨きながら、祖父が笑った。

「路上に絨毯を敷いて、さじをずらりと並べて買ってもらうか。興味を持った人には来歴を披露する。どこの産か、どうやって手にいったか、どこが魅力か。のんびり客と話をしながら、さじの行商をするんだ」

①荷物運びとかいらん？ そしたら、私もすみっこにいる」

「体力的にも無理だな。一度ぐらいやってみてもよかった」

祖父が今度は木製のスプーンを布で拭いた。素朴な木目をいかしたスプーンで、コーンスープやシチューをすくって食べたらいしそ

うだ。でも、良い落ち着き先が見つかったんだ。若い友人が料理屋を開くので、彼女に譲る。好きなさじを客が選んで食事をする仕組みにすると言っていた」

鉋物に本、絨毯や織物。他にも祖父が集めているものはたくさんある。染め場の奥にはエアコンで常に温度と湿度の管理をしているコレクション用の部屋があるほどだ。

「どうしてスプーンを集めたの？」

「口当たりの良さを追求したかったのと、あとはバランスだな。良い職人が削ったさじは軽くて美しい。手に持ったときのバランスが気持ちいいんだ。そのさじで食事をするのが軽やかでな。天上の食べものを口に行っている気分になる。同じことは私たちの仕事にも言える」

「スプーンと布って、全然別物っぽく思えるけど……」

祖父が手を止めると、奥の部屋に歩いていった。すぐに戻ってくると、手には紺色のジャケットを抱えていた。生地は*ホームスパンだ。

「おじいちゃんのスプーン？」

「そうだ。お祖母ちゃんが織ったものだ。持ってこらん」

渡されたジャケットは、見た目よりうんと軽く感じた。

「あれ？ 軽いね」

「それでもダウンジャケットにくらべると若干重いかな」

ジャケットを羽織ってみるようにと祖父がすすめた。

袖に腕を通したとたん、「あれ？」と再び声が出た。手で感じた重量が身体に伝わってこない。

肩にも背中にも重みがかからず、着心地がたいそう軽やかだ。それなのに服に守られている安心感がある。

「手で持ったときより、うんと軽い」

「手紡ぎ、手織りの糸は空気をたくさんはらむから軽くて温かい。身体に触れる布の感触が柔らかいから、着心地が軽快になる。さじにかぎらず、良い職人の仕事は調和と均衡が取れていて心地よいんだ。音楽で言えば」

「ハーモニー？ もしかして」

「そうだ、よくわかったな」

「私、中学からずっと合唱部に入ってたの」

②祖父にジャケットを返すと、慈しむようにして大きな手が生地を撫でた。

「美緒は音楽が好きなんだな」

あらためて考えると、合唱はそれほど好きでもなかった。

熱心に部に勧誘されたことが嬉しかった。合唱部はみんな仲が良さそうに見えたから、その輪に入っていると安心できただけだ。

「部活、そんなに好きじゃなかったかも。なんか……私って本当に駄目だな」

ジャケットを傍らに置くと、祖父がスプーンの梱包作業に戻った。

「この間、*汚毛を洗っただろう？ どうだった？ ずいぶんフンをいやがっていたが」

「臭いとは思ったけど、洗い上がりを見たら気分が上がった。真っ白でフカフカしてて。いいかも、って思った。汚毛、好きかも」
そうだろう、と祖父が面白そうに言った。

「美緒も似たようなものだ。自分の性分について考えるのは良いことだが、悪いところばかりを見るのは、汚毛のフンばかり見ると同じことだ」

祖父が何を言い出したのかわからず、美緒は作業の手を止める。赤い漆塗りのスプーンを取り、祖父が軽く振る。

「学校に行こうとすると腹を壊す。それほどの繊細さがある。良いも悪いもない。駄目でもない。そういう性分が自分のなかにある。ただ、それだけだ。それが許せないと責めるより、一度、丁寧に自分の全体を洗ってみて、その性分を活かす方向を考えたらどうだ？」

③「活かすって？ どういうこと？ そんなのできるわけないよ」

「そうだろうか？ 繊細な性分は、人の気持ちの*あやをすくいとれる。ものごとを注意深く見られるし、集中すれば思わぬ力を発揮することもある。へこみとは、逆から見れば突出した場所だ。悪い所ばかり見ていないで、自分の良い点も探してみたらどうだ？」

「ない。そんなの」

「即答だな」

祖父がスプーンに目を落とした。

「だって、ないから。自分のことだから、よくわかってる」

それは本当か、と祖父が声を強めた。

「本当に自分のことを知っているか？ 何が好きだ？ どんな色、どんな感触、どんな味や音、香りが好きだ。何をするとお前の心は喜ぶ？ 心の底からわくわくするものは何だ」

「待って。そんなの急にいっぱい聞かれても」

「ほら、何も知らない。いやなところなら、いくらでもあげられるのに」

からかうような祖父の口調に、④「美緒は顔をしかめる。」

「そんなしなめ面をしないで、自分はどうな『好き』でできているのか探して、身体の中も外もそれで満たしてみる」

「好きなことばかりしたら駄目にならない？ 苦手なことは鍛えて克服しないと……」

「なら聞くが。責めてばかりで向上したのか？ 鍛えたつもりが壊れてしまった。それがお前の腹じゃないのか。大事なもののための我慢は自分を磨く。ただ、つらいだけの我慢は命が削られていくだけだ」

祖父がテーブルに並べたスプーンを指差した。

「手始めに、気に入ったさじがあったら、それで食事をしてみる。良いさじで食物を口に運ぶ感触をとことん味わってごらん」

「えっ、でも……」

戸惑いながらも梱包していないスプーンと、コレクションが納まった箱を美緒は一つずつ見る。祖父が集めたものは、どれも色や形が美しい。そしておそらく外見のほかにも祖父の心をとらえた何かがある――。しだいに興味がわいてきて、次々とスプーンが入った箱を開けて見る。

木材、金属、動物の角。さまざまな材質のスプーンを持ったあと、最後に残った箱を開けた。

赤や黒、赤紫色に塗られた木製のスプーンが出てきた。

無地もあるが、金箔きんぱくなどで模様が描かれたものや、虹色に輝く装飾が施されているものもある。

一本、一本見ていくなかで、シンプルな黒塗りのスプーンに心惹かれた。手にすると、スプーンの前から柄に向かって、真珠色の光が走った。

「おじいちゃん、これはうるし？」

祖父はうなずいた。

「これがいい、これが好き。おじいちゃん、このスプーンをください」

「美緒はこれが好きか。どうしてこれを選んだ？」

「直感？ 何かいい感じ」

祖父の目がやさしげにゆるんだ。目を細めるとやさしく見えるところは、*太一たいちと似ている。

ほめられているような眼差しまなざしに心が弾み、黒いスプーンを見る。

幼い頃、壁にかかった視力検査表で視力を調べられたことがある。

黒いスプーンを右目に当て、おどけてみた。

「視力検査……」

一瞬、不審そうな顔をしたが、祖父はすぐに横を向いた。口もとに軽くこぶしを当てて、笑っている。

おどけた自分が猛烈に恥ずかしくなり、美緒はスプーンを握った手を膝に置く。

たいして面白くもないだろうに、祖父は目を細めてまだ笑っていた。

(本文に一部表記の変更があります。)

(注) ホームスパン||太い糸を用いた毛織物。

汚毛||洗われていない未加工の羊毛。

あや||入り組んだ部分。

太一 美緒の父の従姉の息子。母とともに祖父の工房で働いている。

(一) 線部①「荷物運びとかいらはない？ そしたら、私もすみっこにいる」とありますが、このように発言したときの美緒の気持ちとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア さまざまな土地に行ってきた祖父が過去に旅に出ようとしていたことに興味が湧き、今まで世界を旅したことがないので見に行きたいと思う気持ち。

イ 過去に旅に出ようとしていた祖父の話聞いて、自分も祖父と一緒に旅をしながらさまざまなものをコレクションしていきたいと思う気持ち。

ウ これまでに収集してきたものを前に、過去に考えていたことを長々と話す祖父の様子を見て、興味がそそれ楽しそうに感じる気持ち。

エ コレクションしてきたものを楽しそうに磨く愉快的祖父の姿を見て、祖父とともに旅に出ることができたら、楽しく旅を満喫できるのではないかと感じる気持ち。

(二) 線部②「祖父にジャケットを返すと、慈しむようにして大きな手が生地を撫でた」とありますが、このときの祖父の様子として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 美緒との会話がお祖母ちゃんのジャケットによって弾んで楽しかったので、これからも職人として良い仕事をこなして美緒との会話を楽しんでいきたいと意気込んでいる。

イ お祖母ちゃんのジャケットのおかげで美緒の良い一面を垣間見ることができたことに感激し、美緒のためにもお祖母ちゃんのジャケットを綺麗に保存していこうと考えている。

ウ 美緒がお祖母ちゃんのジャケットを非常に褒めてくれたことに感動して、このジャケットを大事にするとともにより一層仕事に励んでいこうと決意している。

エ 美緒が自分の言いたかったことを理解してくれたことを嬉しく思い、そのきっかけを作ったお祖母ちゃんのジャケットをこの先も大事にしていこうと思っている。

(三) 線部③「活かすって？ どういうこと？ そんなのできるわけないよ」とありますが、このように美緒が言った理由を説明した次の文の□に入る最も適当なことを、本文中から五字で抜き出さない。

自分の良い点などないから活かすことはできないだけでなく、自分のことを□だと感じているから。

(四) 線部④「美緒は顔をしかめる」とありますが、このときの美緒が顔をしかめた理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア これまで自分のことをよく知っていると知っていたが、今まで気づかなかった自分の嫌なところを祖父に言われて、本当はよく知らなかったのだと感じたから。

イ 自分に良い点などないと思っていたにもかかわらず、自分の良い点を無理やりにもあげさせようとしてきた祖父の強引な様子を見て立ちを覚えたから。

ウ 自分を一番知っているのは自分だと主張したのに、好きなものを即答できなかったことで、祖父に本当は知らないのではないかと指摘され不快に思ったから。

エ 祖父が言っていることを理解できずに苦しんでいる自分のことを、からかうような口ぶりで問い詰めてくる祖父の姿に怒りの感情が湧いたから。

(五) 本文の表現の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア「全然別物っぽく思えるけど……」や「苦手なことは鍛えて克服しないと……」などと含みを持たせるように表現することで、美緒の不安定な心情を表現している。

イ お祖母ちゃんのジャケットを羽織ったときや祖父が集めたスプーンを眺めているときに抱いた感覚を描くことで、美緒の感性の鋭さを暗示させている。

ウ「即答だな」や「手始めに、気に入ったさじがあったら、それで食事をしてみる」などから、祖父の、美緒に対する呆れあきの感情を表している。

エ 祖父に対して黒いスプーンを用いておどける美緒を描くことで、美緒と祖父との間にあったわだかまりが解消されたことを示している。

(六) 線部「祖父の目がやさしげにゆるんだ」とありますが、このときの祖父は美緒から何を感じて目をやさしげにゆるめたのですか。美緒の様子を明らかにして、本文中のこのことを用いて、六十字以内で答えなさい。(句読点も字数に含めます)

〔問題五〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

ここで①「ちよつと人間の鼻が日本語で普通はどのように形容されているのかを考えて見ましよう。日本語でと断つたのは、あとで説明するように鼻を描写する言葉は、②「言語が違うとまったく違ってくるからです。言うまでもなく日本語でそれは普通〈高い〉か〈低い〉です。でもこの形容はよく考えて見ると、ア「おかしな表現法なのですが、そのことに気が付いた方がいるでしょうか。」

そもそも一般に何が〈高い〉とか〈低い〉とか言われる場合は、地面からそのもの上部が、どのくらい離れているかが問題になっているときです。〈山が高い、低い〉、〈高い樹〉〈高い建物〉など皆それです。人の背が高い、低いと言うのも全く同様で、〈高い、低い〉という言葉の使い方としてはごく自然なものと言えます。ところが鼻が〈高い〉となると、これは③「言葉遣いとして自然なものとは言えないのです。鼻は頭の天辺に上向きに生えているわけではなく、顔面から水平前方に突き出ているものだから、これを高い、低いと称するのは普通の使い方とは言えません。」

日本語では、一般にある特定の身体部位が体から水平方向に④「突出しているとき、それを形容する言葉は〈出〉です。〈出っ歯〉〈出目〉〈出べそ〉〈出っ尻〉などのほかに、〈腹が出てきた〉、〈額、頬骨が出ている〉などです。しかしこれらの言い方は程度の差はあるにしても、概して余り褒め言葉とは受け取られません。と言うのもこれらの表現は、その身体部位が一般の人の平均と思われる「度合い」を越して突き出ている、みっともないと受け取られている事を、話し手がそれとなく指摘しているものだからです。

ところが鼻だけはどういうものか日本文化では特別扱いで、顔から前に突き出ている度合いが普通以上であることがむしろ望まれる身体部位なのですから、貶め「おとし」の含みのある〈出〉は使えないことになりました（〈出鼻を挫く〉と「よく書かれる言い方に含まれる〈はな〉は、本来は〈先端、始まり〉などを意味する〈はな〉で、むしろ〈出端〉と書く方が正しく、鼻とは別のことばです）。そこで何時からかは知りませんが、地面からの距離の大小を表す〈高い、低い〉が鼻に転用されるようになったと考えられます。顔面を地面と見立てて、そこから前方「エ」つまり上方に離れてゆく鼻の先端を、山や樹を形容する〈高い、低い〉を使って表現したものとされます。でも私の知っている言語で、鼻にこのような山や樹を形容する〈高い、低い〉を使うものはありません。どこでも人間の鼻は〈大きい、小さい〉か、または〈長い、短い〉と言われるのが普通なのです。

日本では昔から高い山、高い樹木は常に信仰の対象でしたし、高い建物は建てた人のもつ権力、威光の象徴でした。ですからこのように〈高い〉ということにプラスの価値を置く日本人が、他人よりは突出度の大きい鼻を肯定的な意味合いをもつ〈高い〉で表すことになったと考えられるのです。

（鈴木孝夫『日本語教のすすめ』より）

(一) 線部①「ちよつと」と同じ品詞のことばを、本文中の——線部ア、エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

(二) 線部②「言語が違うとまったく違ってくるからです」を単語に分けると、いくつになりますか。漢数字で答えなさい。

(三) 線部③「言葉遣い」とありますが、——線部が誤った言葉遣いになっているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ぜび、そちらの本を読ませていただきましたか。

イ こちらの海外の有名な絵画が見られることを嬉しく思います。

ウ このアンケート結果について、どのようにお思いになりますか。

エ 以前教えていただきましたがうろ覚えですので、再度教えていただけますか。

(四) 線部④「突出し」と、——線部が同じ活用の種類になっているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今あなたが持っている本を今度貸してほしい。

イ 公園で小さな子どもたちが楽しく遊んでいる。

ウ 何事においても努力することを忘れない。

エ 最後に解答を見直すように心掛ける。

(五) 線部「高い」ということにプラスの価値を置く日本人が、他人よりは突出度の大きい鼻を肯定的な意味合いをもつ〈高い〉で表すことになったと考えられる」とありますが、筆者がこのように述べる理由を説明した次の文の□に入る最も適当なことばを、それぞれ本文中から、①は八字、②は六字で抜き出しなさい。

本来、鼻には〈出〉を使うべきだが、〈出〉は□①「言葉であり、〈高い〉にプラスの価値を置く日本人にとって

□②「姿であると相手に指摘する表現となると考えたから。」